

発表タイトル	カリブ海沿岸でのウミガメ捕獲 ーニカラグアにおけるミスキートの網漁の事例ー
発表者所属名	地域文化学専攻
発表者氏名	高木 仁

中央アメリカのニカラグア共和国の東部、ミスキート海岸に古くからアオウミガメ (*Chelonia mydas*) を利用する人々が暮らしている。しかしながら、アオウミガメは、人間が決めた国境線を超えて生息し、個体数の警鐘が鳴らされている動物である。この地域においてアオウミガメの個体数の調査研究、保全活動は 1950 年代中盤から現在までおこなわれている。一方で、利用側の精緻な情報は 70 年代初頭にニーチマン (1973) が調査した銚つきの漁しかなく、アオウミガメの利用と保全の調和を考える場合に、利用側の人々の理解やその実態の把握が必要である。

本発表では、現地調査に基づきミスキート海岸の村落での現行のアオウミガメの捕獲に焦点を当てる。特に 1. ウミガメ捕獲の時期、捕獲地、捕獲道具、2. 捕獲の実際、3. ウミガメ捕獲の活動時間と捕獲数の 3 点に重点を置いて説明する。調査場所はニカラグア、北大西洋自治州の東北部に位置する村落 A を選んだ。村には主にミスキート語を話す人々が 1586 人住み、種々様々な生業、生産活動をして暮らしていた。調査期間は、2009 年 2 月～2009 年 5 月の約 3 ヶ月間で、2009 年 3 月におこなわれたウミガメの捕獲に参加した。

結果 1. 村でのアオウミガメの捕獲は、自治政府の決めた漁期のもと盛んに行われていた。捕獲場所は、ミスキート海岸の村落 A にあるミスキート諸島周辺海域であった。参与した船は、全長約 10m、幅約 2m の小型帆船(ヨット)であった。実際に、この船を率いたのは、10 代から 30 代の 4 人の村の男性であった。捕獲道具の網は 20m ほどの長さで、編み目は約 40cm 四方であった。

結果 2. アオウミガメの捕獲は泊まりがけで行われた。漁は捕獲場への「移動」、ウミガメの「探索」、網の「仕掛け」、そして「仕掛けの回収」の流れでおこなわれた。この一連の捕獲活動が 2 度行われた。1 回目で雌を 3 頭、2 回目で雌 9 頭、雄 1 頭の計 10 頭を捕獲し、村を出て再び村に戻るまで 6 日間で合計 13 頭 (雌 12 頭、雄 1 頭) を捕獲した。

結果 3. 活動時間は 6 日間、計 115 時間であった。「探索」「仕掛け」といった漁場での捕獲活動に費やした時間は 21 時間 30 分であった。21 時間 30 分の中で、ウミガメの捕獲は 2 回行われた。時間はそれぞれ初回が 12 時間 45 分、2 回目が 8 時間 45 分で、初回の捕獲に費やした時間は合計で 4 時間多いが捕獲数は 3 頭と 2 回目の 10 頭と比べると少ない。

本発表での結果、特に結果 3 で得られた実際に海上での活動時間の長さとは矛盾する捕獲数という結果は、アオウミガメの捕獲の予測の難しさを示唆していると考えられるだろう。長時間をかけて「探索」、「仕掛け」をおこなったからといってアオウミガメが数多く捕獲できるわけではなく、むしろ短い時間でウミガメの行動範囲に的確に網を仕掛けることが、捕獲が成功するか否かにかかわっているのだろう。今後はこの結果を一つの比較対象とし、さらに捕獲のデータを蓄積していく。